

# 困難を乗り越えたアスリート 15

## 原爆に負けてたまるかと 甲子園へ2度導く 元広陵監督の森岡栄司さん

64回目を迎えた8月6日の広島での平和祈念式典で、秋葉忠利広島市長は核廃絶への誓いを、英語で「Yes we can」と締めくくった。もちろんアメリカのオバマ大統領を意識してのスピーチだが、広島にはオバマ氏より、もっともっと前に「私たちができる」ことを示した野球人がいた。地元関係者が「原爆監督」と親しみをこめて呼ぶ、元広陵高校野球部監督の森岡栄司さん(77)である。

(新聞うずみ火・吉岡雅史)

### 上半身から焦げた においがした

当時広陵中学1年だった森岡さんは、あの朝、建物疎開のため動員され、爆心地から1・8キロの場所にいた。300人の生徒が4列に整列し、列の先頭だった。

熱線を真正面から受けて、すぐ気を失い、吹き飛ばされた瞬間の記憶はあまりないという。

「顔と腕、そして上半身と、特に左半分がひどいやけどで、上半身から焦げたにおいがした」

森岡さんは1993年に喉頭がんのため、声帯を切除している。それでも身振りを交え、タケ子夫人の補助を通じて説明してくれた。

### 傷口からウジがわき 大きなケロイドが残る

まともな治療も受けられず、すぐ傷口からウジがわいた。10日後に母親が搬送先に駆けつけたときも、すぐに判別できない状態だった。

まわりの被爆者はバタバタと死んでいく。「自分もいつ死ぬのか」。森岡

さんは恐怖を味わい続けた。広島市のデータでは、爆心地から半径1・2キロ以内には約14万人が死亡。1945年(昭和20年)の年末までに14万人が亡くなった。生存する被爆者は約24万人で、この1年間で死亡した被爆者は6000人近くにのぼる。幸い森岡さんは一命をとりとめたが、動くとき息切れがした。やけどは治っても、あちこちに大きなケロイドが残った。

### 上級生は兵隊あがり 暴力や猛練習にも耐えた

「体力の限界を確かめたい」との理由から、野球部に入部したのは被爆から4カ月後だった。上級生はみんな兵隊あがり、「鉄拳制裁は当たり前だった」。森岡さんは、暴力にも猛練習にも耐え抜いた。

「40人いた同級生で、最後まで残ったのは私ひとり」。球児として、夢の甲子園こそあと一歩のところで逃したが、最後はキャプテンも務めた。「原爆には負けられない」。その一心から、専修大学に進んでも野球を続け、大学4年になると、監督に請われて二軍監督に就任した。この経験がのちのち生きることになる。

### 卒業しばらへん 広陵野球部監督に

卒業後、野球から離れていたが、64年春にOB会の推薦を受けて32歳で広陵野球部の監督に。野球のために会社をやめ、飲食店に職を変えて、後輩の指導に明け暮れた。猛ノックを浴びせ、手のマメがつぶれ、血がにじんでもノックバットを振り続けた。

### 200人いた部員の 性格や健康をメモに

その裏で、200人ほどいた部員全員の性格や健康状態を詳細にメモする配慮も欠かさなかった。さらにその年の選抜で優勝した尾道商業への対策にも余念がなかった。

### 船出して3カ月 甲子園出場を実現

船出して3カ月。かくして広島大会決勝で、ライバル・尾道商を倒し、最初の夏でいきなり甲子園出場を実現



「原爆監督」と言われた森岡さん

した。入場行進で校名がアナウンスされると涙が出た。1回戦をサヨナラスクライズで突破すると、ベスト8まで勝ち進んだ。

「ひとりでは来れなかった」という周囲への感謝。そして「監督とは、多

くの人の夢を実現できる仕事なのかもしれない」という喜びを、甲子園は教えてくれた。

ちなみに、広島大会の準決勝で前代未聞のハプニングがあった。超高校級のエースで4番の山本浩二を擁する対戦。広陵が着々と得点すると、相手エースはブツンして、自らマウンドを降りたという。

「言わずと知れたのちの『ミスター赤ヘル』だが、朴訥とした人柄の山本氏にしては、珍しく荒々しいエピソードである。

話を戻そう。広陵は翌年も夏の広島甲子園の1回戦で好投手・

## いみせのヨコハマ日記

